

FM花巻放送局長

落合 昭彦 氏 (高校35期)

東京出身の私が、杜と水の都と言われるみちのく盛岡に住んでから間もなく25年になります。最初の就職先であったテレビ東京を退職し、変な名前の岩手めんこいテレビのアナウンサーとして盛岡に転居する決意をした精神的背景は、今思うと立川高校時代に芽生え始めていたのではないかと思う事があります。

私が立川高校に入学したのは、昭和55年(1980年)。当時はまだ「学校群制度」が継続中で、立高は、おとなりの国立とグループを組んでいました。今の在校生には信じられないかもしれませんが、要するにどちらの学校に受かるかわからない(成績順に振り分ける)システムだったのです。

結果的に立川高校に選ばれた？私は、またまた結果的に2年生まで男子クラス(当時は8クラス中3クラスだった)となり、幸か不幸か、旧制府立二中からのバンカラの学校生活環境？が整った(笑)のでした。

立川高校の3年間、私の家族は北陸の金沢に住んでいて、私自身は日野にある親戚の家のお世話になっていました。中学まで、転勤族の父の会社の都合で何度も引越しを重ねていた私は、いつも自分の古里がほしいと思っていました。

そうした中で、合唱祭から演劇コンクールまで1年を通じて多くの行事に関わっていた私にとって、立川の街や多摩川の河川敷、またそこから見る富士山などがいつのまにか古里の原風景になっていたようです。

しかも同期の生徒は、東は吉祥寺から西は奥多摩まで、多摩全域から集まっており、毎日ちょっとした時間を見つけては卑屈な「差別化」や「お国自慢」が始まる始末。いわく「南武線を使っているやつらは1時間に3本しかないから駅まで小走りで帰る」とか、「吉祥寺のやつらと青梅のやつらでは着る服のセンスが違う」とか…。学区が広がったことで自分の住んでいる地域への意識が研ぎ澄まされたのでしょうか。

この感覚は、さらに広く全国の出身者が集まる大学時代に「東京を故郷とする想い」へと発展し、放送局を進路に決めたときも「東京を伝えるテレビ」であるテレビ東京を第一に志向したのです。

しかし私の入社した頃のテレビ東京は、関東ローカルから全国キー局へと方向転換していた時期。とにかく地域に密着した放送がしたかった私はアナウンサーになれることもあり、全く縁もゆかりもなかった岩手県の新局に転職することを決意！27歳の時でした。



盛岡の自宅マンションから見た岩手山の雄姿。南部富士とも言われ、高校時代によく多摩川から見た富士山を想い出します。



沿岸被災地の大槌町出身の歌手、臼澤みさきさんと。レコード大賞新人賞などを取って全国的に有名になりました。

アイ・ターンで岩手に行き、岩手のニュースやグルメ情報等を伝え始めた私は、ローカル放送の特徴である、視聴者との距離の近さ、伝えるネタの身近さが本当に心地よく、やりがいも感じました。そしてこの四半世紀で、岩手は名実ともに私の「第二の故郷」になったのです。

いま私は、「地域密着」をさらに追及するため、宮沢賢治の生まれた花巻を主な放送エリアにするコミュニティラジオ局、FM花巻の放送局長として、まさに身近な生活情報を伝える日々です。このラジオ局は開局5年目になりますがあの東日本大震災では1か月に渡って、24時間の災害放送も実施しました。

あっ、そうそう、マイクに向かって高校時代のことを話す機会も結構あるんですよ！何より私にとって立高時代はトークネタの宝庫ですから(笑)。

振り返ると、もし立川高校に入っていなければ、こうした進路の志向性を持つこともなかったかもしれません。在校生の皆さんには、学校生活の瞬間瞬間が将来の進路につながるヒントになっている…という自覚をもって、色々なことにチャレンジしてほしいと思っています。立川高校にはそのチャレンジを可能にする、長い伝統が育む「舞台」がいくつも用意されています。

この壁新聞を読んでくれた後輩の誰かに、何か少しでも参考になることがあればうれしいです。悔いのない立高生活を送ってください…。北の国からいつも皆さんと立高のことを思っています。

